

令和6年度

一般入学試験B日程 学科試験問題

国 語

1. 試験時間は、60分間です。
2. 問題は、この冊子の1～14ページにあります。解答用紙は別に1枚あります。
3. 解答は、解答用紙の問題番号に対応した解答欄に記入してください。
4. 問題や解答を、声に出して読んではいけません。
5. 印刷の不鮮明、用紙の過不足については、申し出てください。
6. 問題や解答についての質問は、原則として受け付けません。
7. 終了の合図があったら、すぐ筆記具を置いて、解答用紙を机の上に伏せてください。
8. この問題用紙は、持ち帰らないでください。
9. 不正な行為があった場合は、解答をすべて無効とします。
10. 答案の文字は、ていねいに、かつ明瞭正確に書いてください。
11. その他、試験の進行については、監督者の指示に従ってください。

植草学園大学 発達教育学部

受験番号		氏名	
------	--	----	--

第一問 次の文章を読んで、後の問い（問1～5）に答えなさい。

メソポタミアのシュメル人——ティグリス・ユーフラテス両河のあいだの地

現在は見渡す限りの砂漠に囲まれた沼地の葦原あしはらしか見当たらないイラク南部。この地で、約七〇〇〇年前に世界最初の都市文明の^アホウガ「ウバイド文化期」が開花した。

このウバイド文化に根差した「村・町」が一五〇〇年の時を経て「都市」へと発展する。人類初の「都市文明」を、この地に完成させたのがシュメル人である。

地図を見ると、三角形の大きなおむすびのような形をした現在のイラクであるが、二本の大河が北西のシリア国境線から南東のペルシア湾（またはアラビア海）へと貫いている。北東側を流れているのが流れの速いティグリス河で、現在の首都バグダード市内を貫通している。南西側を流れるユーフラテス河は比較的ゆるやかな流れで、古代都市バビロンはこの河のほとりにあった。

この両大河は、隣国シリア領を経てトルコ東部までさかのぼった水源アラト山塊からの雪解け水を運んでくるが、ときには突然の大洪水を引き起こすこともあった。古代人にとっては予測もつかないこうした大惨事は「大洪水伝説」として、第二章に見られるように神話の世界にも描かれている。

ティグリス・ユーフラテス両大河に挟まれた地域を、古代ギリシア人は「メソポタミア」と呼んだ。「メソ」は「中間」、「ポタミア」は「河（ポタモス）の」というギリシア語である。

古代メソポタミアの北方はアッシリア、南方はバビロニアと称された。バビロニア地方をさらに南北に分けると、北部がアッカド地方、南部がシュメル地方ということになる。

A

イラク南部の両河付近は現在でも沼の多い湿地帯であるが、今から一万年前にはペルシア湾の海岸線は現在よりもっと内陸部にあったようで、約五〇〇〇年前のシュメル諸都市の多くはその内海から^aを引き、水利を活用した交易活動で経済

を潤していた。

他方、石材や大きな木材に乏しいこの地域で、一般庶民が日常生活に使用できるものといえば、塩害にも水害にも強いなつめやしと湿地に生い茂る葦、そしてとりわけ重要なのが、どこにもかしこにもイジュンタクにある「泥んこ・粘土」であった。

「シュメル」という呼称はアッカド語で、シュメル人自身は自分の国を「キエンギ」と呼んだ。「キ」は大地、「エン」は主人という意味を表し、「ギ」は「葦」の絵文字から発達した楔形文字だが、その意味は文明を表す単語「ギ（ール）」とする説もある。

ともあれメソポタミア南部は葦と泥んこが豊富な地域であった。葦は割いて筵むしろに編み、泥んこは固めて乾かして煉瓦れんがを作って、小さな住宅から倉庫や城壁、果ては神殿付属の巨大な聖塔「ジクラト」まで建造した。泥んこをこねて轆轤ろくろにかけてさまざまな形の土器を製作した。また泥んこの粘土を丸めて掌てのひらに載せて、柔らかいうちに葦筆で文字を記した。それが粘土板文書で、お役所仕事や商取引には欠かせない**b**が作成されたのである。

さらには、粘土を器の口縁部や、神殿の門や倉庫の門かんばんきに塗り付けて、そこに円筒印章を転がして封泥ふうでいとし、国庫財産の保管を確実にした。

このように、メソポタミア南部の「泥んこ」は庶民の強い味方であるばかりでなく、シュメル都市国家体制にとっても重要な役割を果たした。第一章で語られるように、泥んこや粘土はシュメルの神話では「人間創造」にさえかわっているのであった。

円筒印章その他の造形作品に表された「物語」

ウビチクされた余剰生産物資や轆轤で大量生産される土器類が、ウルク文化期（前三五〇〇―三二〇〇年。年代は概略であるが、以下「頃」は省略。また王名の年代は在位年を示す）に交易で大きな**c**を得るようになると、帳簿などの必要性から印章や楔形文字がその産声をあげた。

我が国では「ハンコ」は現在でもお役所仕事になくてはならない重要なものであるが、今から約五〇〇〇年前のウルク（現

代名ワルカ、聖書のエレクト）ではすでに「ハンコ」の一種である円筒印章が常用されていた。「円筒印章」とは文字どおり「円筒形のハンコ」のことである。ウルク文化期後半に成立したもので、形や大きさは私たちが普段使用している三文判と似たようなものが多いが、私たちのハンコは底面に名字や姓名を彫ったスタンブ型なのに対し、シュメルのハンコの特徴は胴体部分にぐるりと図像や楔形文字が彫られていることで、これを柔らかい粘土板上に押し付けて転がすと、展開図柄が続けざまに表れるのである。胴部は底面より印面が広いので、かなり込み入った内容の図柄も彫り込むことができ、それを解釈することによって、古代の「神話物語」を推測することもできる。「聖婚儀礼」や、古代オリエント全域に流布した『ギルガメシュ叙事詩』や天地創造神話『エヌマ・エリシュ』の神々の戦いを髣髴とさせる闘争場面、家畜や野獣や人間が混在する呪術や儀式の場面なども多い。

石材の乏しいメソポタミアでは貴重な大型石製容器にも、儀式や神事を d した図像が彫られているものがある。たとえばウルク出土のアラバスター製大杯の細長い胴部には三段の帯状に浮彫が施されているが、最下段にはシュメル人の生活を支える大麦などの植物、羊などの動物、水の流れが描かれ、中段には籠や壺を捧げもつ裸体の人々の行列が見られる、最上段には女神イナンナの神殿の門を象徴する二本の葦束を境として、向かって右側は神殿内部の供物類が表され、左側には立派な衣装の女性が、捧げ物をもって先導する裸体男性とそれに続く人物の裳裾をかかげた従者らを迎えている場面が描かれ、「新年祭」「豊饒儀礼」を表した最古の図とも考えられている。

また貝殻や貴石を粘土板や木枠にはめこんだモザイク細工にも、物語を想起させる人物や動物が描かれたものがある。たとえば「ウル王墓」出土の「旗章（スタンダード）」には「戦争場面」「宴会場面」が表裏に表されていた。

メソポタミアから大海原までを制する者

シュメル地方は、沼地と砂漠に囲まれた土地であったが、ここに芽生えた文明を支える経済活動で最も大きな役割を担ったのは「二つの大河」ティグリス・ユーフラテスであり、大洋つまりペルシア湾である。陸路の「道なき道」をたどり、驢馬の背に荷物を積んで交易するよりは、船で繰り出すほうが大量の物資輸送に e であることはまちがいない。

両大河の支流と運河とは、当時の人々の文字どおりの「生活用水路」であった。昔も今も人々は日々の暮らしに必要な物

資を小舟で運んで、小商いをした。巷ちまたの人間ばかりでなく、大いなる神々もまた聖船で都市から都市へと移動すると考えられていた。

シュメル歴代の王はメソポタミアでは産出しない石材、巨木材、貴石類を求めて、河から入り江へ、入り江から果てしなく海洋へと冒険を重ねたのであったが、流れの比較的ゆるやかなユーフラテス河を船でさかのぼってゆけば現在のシリア北部に達し、そこから少し陸路をいけば地中海岸はもう目の前である。そして海岸沿いに南下すれば、レバノン杉の生い茂る「杉の山」に分け入ることもできる。侵入された側から見れば「異邦人オ襲来」の大椿事だいちんじかもしれないが、メソポタミア方面からの闖入者ちんにゅうしゃにとっては、耳慣れぬ言葉、変わった服装や態度の人々がまさに「異次元の怪人」であって、異国で怪人や怪獣と戦い、杉の巨木を得て、遠路はるばる帰国した「英雄Bたち」の活躍かつやくぶりは、子々孫々にまで「英雄譚えいゆうたん」として語り継がれたであろう。

（岡田明子 小林登志子『シュメル神話の世界』より）

＊出題の都合上、原文の一部分を改変してあります。

問 1 傍線部アゝオのカタカナは漢字で、漢字は読みをひらがなで答えなさい。

問 2 空欄 aゝ e に入る語句として、最も適する語を答えなさい。

問 3 我が国の印鑑をシュメル人式に扱うとどうなるか。最も適するものを、次の 1ゝ 4 のうちから一つ選びなさい。

- 1 通常通りの印形が示される
- 2 日本の物語が表示される
- 3 泥の分、表示が立体的になる
- 4 まったく文様は表れない

問 4 空欄 A に適する見出しを答えなさい。

問 5 傍線部 B 「英雄たち」にあてはまらないものを、次の 1ゝ 4 の中から一つ選びなさい。

- 1 シュメル歴代の王
- 2 貿易を重ねる交易者
- 3 メソポタミア方面からの闖入者
- 4 異次元の怪人

第二問 次の文章を読んで、後の問い（問1～6）に答えなさい。

重竜は、春枝と結婚をしていたが、子どもができなかった。ところが、重竜はひそかに付き合っていた年の離れた千代に子どもができたことを知った。重竜は、子どもがほしくて春枝と離婚した。子どもの名前は竜夫といい、真面目な中学生になった。ある日、竜夫の友人の関根が用水路に一人で釣りにいき溺れて死んだ。竜夫は、関根に釣りに誘われていたのに断ったことを後悔していた。そんな時、重竜が脳溢血で倒れ、病院に運ばれたが状態は悪化していった。竜夫は父のことを心配しつつも、いつものように学校に通っていた。

竜夫はふと英子に関根のことを話したいアにかられた。自分の前から永久に姿を消してしまった友もまた、自分と同じように、いやひよつとしたら自分よりもつとひたむきに、英子に魅かれていたのであった。

「関根が英子ちゃんの写真を持つとったがや」

と竜夫は言った。英子は決して関根のことを悪く思わないだろうという確信があった。

「……写真？」

「うん。英子ちゃんの机から盗んだがや」

思い当たるように、英子は目を瞠いて、遠くに視線をそらした。日ざかりの道を自転車に乗って遠ざかっていく関根圭太の最後の姿を思い出すと、竜夫は突然英子に対してイになっていった。

「その写真を、俺、関根から貰うたがや。友情のしるしやと言うて、関根がくれたがや」

そのとき、級友たちが廊下の向こうからやってくるのが見えた。竜夫は慌てて、英子に言った。

「螢狩り、行く？」

「うん、行く。母さんに頼んでみる」

竜夫は教室に駆け戻った。誰かに話しかけられて、それに答え返す竜夫の声が、いつまでもうわずついていた。次の授業が始まってすぐ、用務員が教室に入ってきて教師に何やら耳打ちした。教師は竜夫の席まで来ると、「校門のところでお母さんが待つとられるから帰られ……」

とささやいた。竜夫は、父が死ぬのだとその瞬間思った。教室を出ていく竜夫を級友たちは一斉に見つめていた。窓ぎわの英子の顔がぼっと白くかすんで見えた。

校庭の周りをぐるりと取り囲む樹木の若葉が、曇り空の下ではたはたとゆらめいている。立山の、灰色の頂だけが、はるか前方の空中で雲かと見まごうばかりに浮かんている。

「父さんの具合が悪うなったがや。お医者さんが、もう一日か二日のうちやろて」

千代は竜夫を見るなり駆けよってきてそう言った。

親子は西町まで歩き、そこで市電を待った。映画館の看板や百貨店の垂れ幕が色鮮やかな繁華街の中でひとときわはなやいで映っていた。

このまま病院に行かず、繁華街をいつまでも歩いていたいと竜夫は思った。見知らぬ親子連れのあとをこっそり尾けていたり、主人の目を気にしながら本屋でしつこく立ち読みしたり、閑散とした映画館の中で眼前の物語に心を凝らしながらスルメをしがんだりしていることが、なぜかとてもしあわせなことであるように思えて仕方がなかった。初めて抱いた不思議な感情であった。

市電に乗り込むと、その震動の一定のウに合わせて、竜夫はいつしか、父さんが死ぬがや、父さんが死ぬがやと胸の内
で口ずさんだ。すると、

「息子が大きくなって、それからしあわせになってから死ぬがや」

いつか銀蔵の言った言葉と、上半身裸になり桜の木の下で友と肩を組んで眩しそうに目をしかめている十八歳の父の姿が、ひとつに絡み合って思い出されてきた。

市電はかなりの速度で走っていた。竜夫は吊革につかまり大きく前後に揺さぶられながら、窓外の静かな街並を見ていた。死ということ、しあわせということ、その二つの事柄への漠然とした不安が、突然波のように体の中でせりあがってきて、

竜夫は C 自分を抑えていた。

雲が少し切れて、五月の陽が家々の屋根に落ちてきた。関根圭太の垂れぎみの目や大きく丸い鼻が目先にちらついて仕方がなかった。黒い水藻を全身にまといつけ、深い用水路の澄みきった水の上にうつぶせて死んでいるさまが、まるではつき

りと見届けたもののように思い描かれていた。水面の藁の上で羽根を休めていた大きな蝶の、精緻な色模様と、ついしましがた、かすかに額を汗ばませ竜夫の肩口を見つめながら立つていた英子の体臭が、市電の烈しい震動と一緒に交錯していた。

「お前が生まれたとき……」

と千代が言った。いつもはあまり血色の良くない千代の頬が、なぜかエして光っていた。

「父さん、老眼鏡をかけて、お前の掌や足の裏をしらべとったがや。わしとおんなじ手相をしとるって、いつまでも見とった。この豆みたいな足が、ほんとに革靴はいて歩くようになるがやろか。それまで自分は生きとれるがやろか……。五十で初めて子供ができたがや、猫可愛がりやって人に馬鹿にされるほど、お前のことを可愛がった人やがに……」

「すもう取っても、絶対負けてくれなかったがや」

竜夫は吊革につかまっている自分の腕に顔をもたせかけて言った。なぜ負けてくれないのか不思議に思いながら、何度も組みついていった日のことがなつかしかった。

「……ほんとに、いっぺんも負けてくれなかったねエ」

病院の入口で、顔馴染みになった中年の看護婦が待っていた。明け方から大きないびきをかき始めて、それから一度も目を開かないということであった。

看護婦は小走りで病室に入ると、昏睡状態の重竜の両肩を強く揺すった。

「こうやって何度も呼んどるがに……もう意識がないがですちや」

と言った。そして、もう一度肩を揺すると、重竜の耳元で叫んだ。

「水島さん、水島さん、奥さんよ。息子さんも来たがや」

たった一日で驚くほど痩せこけてしまった重竜は、そのとき、うつすらと目をあけた。看護婦があつと叫んで千代と竜夫を見た。重竜は顔を歪めて泣いた。声もたてず涙も流さず、それでも精一杯顔筋をひきしぼって泣いたのである。

千代は重竜の手を握りしめ、口元に耳を寄せた。泣きながら夫が何かつぶやいたような気がしたのであった。

「……はる」

と重竜はもう一度確かにそう言った。そして再び眠りにおちていった。千代の体に絞りあげられるような痛みが走り抜

けた。とめどなく涙が溢^{あふ}れた。千代は夫にしがみつき、
「心配いらんちゃ。何も心配することはないちゃ。春枝さんは、商売も繁盛して、しあわせに暮らしとるって……。父さん、心配せんでもええちゃ」

と叫んだ。

夫の「……はる」という言葉の「オ」が、別れた先妻を指していることを、千代は確信していた。ぬぐつてもぬぐつても千代の顎を伝って涙がしたたり落ちた。

そのあくる日の正午近く、椅子に腰かけてまどろんでいた竜夫が、重竜の死んでいるのに気づいた。千代も同じように、つかのまの眠りにおちていて、二人はいつ重竜が息を引き取ったのか知らなかった。

（宮本輝『螢川』より）

*出題の都合上、原文の一部分を改変してあります。

問 1 空欄ア～オに入る語として最も適するものを、それぞれ次の 1～4の中から一つ選びなさい。

ア				イ				ウ				エ				オ			
1	意識			1	無防備			1	振動			1	緊張			1	断片		
2	暗示			2	無表情			2	律動			2	拡張			2	均衡		
3	慟哭			3	無力感			3	制動			3	紅潮			3	感覚		
4	衝動			4	無理解			4	感動			4	慎重			4	合致		

問 2 傍線部 A 「いつまでもうわずっていた」のはなぜか。その説明として最も適するものを、次の 1～4の中から一つ選びなさい。

- 1 英子と話したあと、教室まで走って息切れしたから。
- 2 英子と話しているところを級友たちに見られたから。
- 3 蛍狩りへの誘いを英子がすぐに了承してくれたから。
- 4 関根との楽しかった思い出がよみがえってきたから。

問 3 傍線部 B 「初めて抱いた不思議な感情」の説明として最も適するものを、次の 1～4の中から一つ選びなさい。

- 1 父の死を目前にして、早く会いたいという気持ちがわき起こること。
- 2 父の死を目前にして、日常の出来事が大切であったと気づいたこと。
- 3 父の死が目前なのに、周囲の動きに気持ちがついて向いてしまうこと。
- 4 父の死が目前なのに、特に悲しいと思う気持ちがわかなかったこと。

問 4 空欄 C に入る文として、最も適するものを、次の 1 ～ 4 の中から一つ選びなさい。

- 1 わっと大声をあげてのけぞりそうになる
- 2 このまま一步も動けなくなりそうになる
- 3 状況を理解しながらもとても冷静になる
- 4 憎しみの感情が湧き出て笑いそうになる

問 5 傍線部 D 「なつかしかった」理由として最も適するものを、次の 1 ～ 4 の中から一つ選びなさい。

- 1 父が真剣に向き合ってくれた思い出であったから。
- 2 父は負けず嫌いなんだと知った思い出だったから。
- 3 父は大人気のない人だと感じた思い出だったから。
- 4 父が勝負にこだわる人だと理解した思い出だから。

問 6 傍線部 E 「千代の体に絞りあげられるような痛みが走り抜けた」とあるが、それはどのような感情を表しているのか。その説明として最も適するものを、次の 1 ～ 4 の中から一つ選びなさい。

- 1 自分より歳が上の重竜の病気に気づけなかった悔恨の心。
- 2 重竜の死を目前に、最愛の人を失うことに対する恐怖心。
- 3 自分のために重竜に苦痛を感じさせてしまった後悔の心。
- 4 自分と子どもを残して先立たれてしまう事への不安な心。

第三問 次の文章を読んで、後の問い（問1、問2）に答えなさい。

絵本の中のオノマトペ

おもしろいことに、絵本でも、対象とする子どもの年齢層ごとに、オノマトペの使われ方に違いがある。0歳用の絵本は、『もこもこもこ』のように、1ページにオノマトペを一つだけ印象深く使うものが目立つ。文の中で使われるのではなく、オノマトペ単体である。子どもはひたすらオノマトペの音と絵の絶妙なマッチングを感覚的に楽しむ。

2歳半以降の幼児を対象にした絵本では、ことばが組み合わせられ、簡単な句や文が使われるようになる。ここでのオノマトペは少し違った役目を担う。『しろくまちゃんのほっとけーき』は、文字どおり主人公のしろくまちゃんがホットケーキを作る絵本である。

どろっとしたタネがフライパンに落とされ、火が通っていくと気泡ができて音がしてくる。片側が焼けてきたらシュッとひっくり返され、フライパンにぺたんと着地。まだ生焼けだった側にも火が通ってきてふくら、そしていい匂い。最後にフライ返しで投げてお皿に到着。おいしいホットケーキのできあがり。

一連の過程を表すと、長い、複雑な文章になるが、それでは1、2歳の乳児にはとても理解できない。でもオノマトペを重ねるとどうだろうか。

ぽたあん どろどろ ぴちぴちぴち ふつふつ しゅっぺたん ふくふく くんくん ぽいっ

すでにこれらのオノマトペを知っている大人はもとより、知らなかった赤ちゃんにも、音、匂い、触感、火が通っておいしくなっていくさまが感じ取れる。視覚、嗅覚、触覚など複数の感覚にまたがったホットケーキの変化の様子が一場面一場面、鮮やかに目に浮かぶ。単語や構文を理解できない赤ちゃんでも十分楽しめる。

もう少し大きい幼児（3歳から5、6歳）を対象にした絵本ではオノマトペはどう使われているだろうか？

たまごはやまをころがって、ころころころころがって、
いわにぶつかり、ぽーんとはねて、ようやく、ストンととまりました。

アレックス・ラティマー著、聞かせ屋。けいたろう訳の絵本『まいごのたまご』からのフレーズである。迷子になってしまった恐竜の卵の親を、みんなで探す話だ。この絵本は、『もこもこ』や『しろくまちゃんのはつとけーき』と違い、なかなか長いストーリーだ。一文一文も長い。動詞もよく使われる。この2行だけでも、「ころがる」「ぶつかる」「はねる」「とまる」という四つの動詞がある。

先ほど、日常場面のアニメーションを保護者に説明してもらった実験について述べた。2歳児に向かって話すときはオノマトペを単体で使うが、3歳児に話すときには動作を修飾する副詞としてオノマトペを使うことが多かった。

絵本の作り方もこれと同じ構造をしている。0歳の乳児の言語学習の主眼は、おもに母語の音や韻律の特徴をつかみ、音韻の体系を作り上げることである。0歳児の絵本は意味を伝えるよりも音を楽しむ。

1歳の誕生日を迎える頃から、本格的に単語の意味の学習が始まる。意味の学習を始めたばかりで意味を知っていることがほとんどない時期は、単語の音と対象の結びつきを覚えるのも簡単ではない。オノマトペの持つ音と意味のつながりが、意味の学習を促す。

2歳近くになると語彙が急速に増え、文の意味の理解ができるようになる。しかし文の中でも動詞の意味の推論はまだ難しい。そのときに、オノマトペが意味の推論を助けるのである。子どもを育てる親たちも、絵本作家たちも、そのことを直感的に知っていて、子どもの言語の発達段階に合わせ巧みにオノマトペを使って、子どもが必要とする援助を無意識に行っているのだ。

(今井むつみ 秋田喜美『言語の本質』より)

*出題の都合上、原文の一部分を改変してあります。

問1 「オノマトペ」は本文中ではどのような意味で使用されているか。二十字以内で説明しなさい。

問2 「オノマトペ」は言語学習の発達段階で役割がどう変わるのか。文中の例を挙げて百字以内で説明しなさい。